通信
2017.9
vol.23

もくじ

■風雲の杜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.1
■いにしえの松木村の森を夢見て・・・・・・P.2～3
■電気を選んで買う時代・・・・・・・・・・P.4～7
■農業用水でエネルギーの地産地消・・・・・・P.8
■編集長のページ・・・・・・・・・・・・・・・P.9
■足尾発！・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.10
■こちら！みちのく事務所・・・・・・・・・・P.11
■こちら！南相馬市・・・・・・・・・・・・・P.12
■松木村跡地の生きものたち・・・・・・・・・P.13
■森の番人のハッピーな一週間・・・・ P.14～15
■新理事、新アドバイザーのごあいさつ P.16～18
■心の森便り・・・・・・・・・・・・・ P.19～20
■編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・P.20

政治も自然環境も、そして市民のパワーも“劣化”させてはならない

世界も日本も政治の“劣化”が著しい。これでは地球、人類の未来は暗い。一体どうなってしまうのか、と暗たんたる思いにとらわれるのは私だけではないだろう。

内閣支持率が急落し、いわゆる“危険水域”に突入した安倍晋三内閣は、「支持しない」（不支持率）の理由がダン突で「総理が信頼できない」という。

「共謀罪」の強行採決、「森友」、「加計」のご意向疑惑、南スーダンのPKO日報問題での稲田前防衛相の責任など国民の不信感が一気に噴き出した形だ。

さらに国連が圧倒的多数で採択した「核兵器禁止条約」に日本政府は交渉にさえ参加しなかった。信じ難い歴史的汚点だった。

内閣改造など小手先の人事で延命を図るよりも、自ら潔く身を引くことこそが政治の常道、スジだが、他に代わる人がいない。今の政権に代わる“受け皿”となる政党、政治勢力がないという、これまた“劣化”の惨状を示していて情けない。

そして最も“劣化”が心配されているのが、米国のトランプ政権だろう。

やはり支持率低迷に加えて、いつまでも疑惑の晴れない「ロシア・ゲート」混乱に拍車のかかる人事の停滞など、とてもまともな政権とは言えない。

その足元を見透かしたように「北朝鮮」の核ミサイル開発の“挑発”が続いている。すでに、一線を越えてはならないとされる「レッドライン」を越え、国防総省の分析ではミサイルに搭載可能な弾頭の小型化も急速に進み、すでに核兵器を“60発”保有しているという。

さらに「北」は、グアム島周辺海域に日本列島（中国地方、四国地方）を越えて4発のミサイル発射の計画を発表し、米朝の非難合戦はエスカレートするばかりだ。

まさに日本にとっても具体的かつ現実的な脅威となり、厳しい対応を迫られている。

そしてトランプ政権の“劣化”の象徴は、地球温暖化防止のための「パリ協定」からの離脱だった。

これまで「森びと」でも同協定の歴史的意義や目標達成への努力の必要性について熱心に語られてきた。

何よりも国連のIPCC（気候変動に関する政府間パネル）やローマ法王、イスラム国20ケ国の宗教指導者たちの危機感の共有と、「このままでは今世紀末に人類は生存の危機に陥る」との厳しい警告が“協定締結”を促進した。

そのことを私たちは決して忘れてはならない。協定離脱は暴挙というだけではなく、トランプ大統領が世界のリーダーたり得ないことを宣言したようなものだ。

理事長　岸井成格

いにしえの松木

主役のブナに長生きしてほしい

足尾・中倉山の「孤高のブナ」がこれ以上衰退しないでほしいと願って、4月29日、「中倉山のブナを元気にする恩送り日」として保護の第一歩を踏み出した。このブナは国有林内に生きているので、林野庁日光森林管理署と当委員会の共同保護活動として行った。

保護策の目的は木の命と言われている地中の根の活動に欠かせない水や酸素の循環を悪化させないことだ。そこで土を固めないように、根の上を登山者が踏まないようにルートを変更させていただいた。

約1ケ月後、当委員会スタッフがブナ観察のために登頂すると、変更ルートははっきりとした道になっていた。心ある登山者の協力に感謝である。それにしても約1ケ月間で新しいルートがはっきりするほどブナを訪れる多くの登山者がいると思うと、何がそうさせるのかと考えさせられる。

(6/4 写真：清水卓)

人間社会の悲しい歴史を幹に宿すブナに魅了されて

4年前、いち早く筆者と一緒にブナに逢いに行った松村宗雄さんは、「一人足尾の山を隈なく登っている男性との出会いがこのブナとの付き合いが始まりだった。この地は銅の精錬で排出された亜硫酸ガスの害にあった場所。中倉山に登ってみると尾根を境にして松木川沿いは亜硫酸ガスによって枯れた木が目立ち、反対側は青々とした草木が生い茂っている。このブナは、百年以上にわたって春夏秋冬のさまざまな出来事を見届けてきた歴史の生き証人といえる。

足尾町の繁栄と銅山の隆盛、1902年に廃村となった松木村での出来事、1973年の足尾銅山閉鎖までの歴史など。このブナに逢うと忘れかけようとしている様々な足尾の歴史が想起でき、人間の愚かさを振り返る場所でもある。このブナと出会った4年前は、煙毒に耐え、風雪にも耐え、ブナの棲息にはギリギリの悪環境で生きてきたブナの生命力に感嘆した。荒れ地に根を張り、天空を見上げている容姿は正に孤高のブナであり、ロマンさえ感じた。

また、これからも元気で生きてほしいと願い、かつまた地球温暖化に少しでもブレーキをかけなければとの願いが沸きあがる。これからもブナに逢いに来る人々に元気な姿で歴史を後世に伝えてほしい」、と言っていた。

松村さんのような気持ちをもって中倉山を上る方が多いと思う。足尾銅山の煙毒で枯れた草木、姿を消した鳥獣や魚、虫たち、そして人々の変わり果てた姿など、全てのいのちの無念さ、怒り、悲しみを伝えるために過酷な自然環境に耐えて生き抜いているブナの逞しさに、多くの登山者は魅了されて惹きつけられているのかもしれない。

先人の伝言を語り続けなければならない

筆者も松村さんの気持ちと同じだが、私はもう少し寓話的にブナの気持ちを脹らませている。

このブナに逢った4年前、幹の胸高直径は45センチ、樹高は10メートル程だった。1年に2ミリ生長したとすれば樹齢は今年で112歳、荒廃地に根を張った年は西暦1905年だった。その3年前に松木村は廃村（1902年）となってしまった。廃村前の松木村は、40戸・270名程の村人が暮らしていた。30ヘクタール余りの耕作地で半農半林の暮らしだったという。

ところが村は煙毒が集中する地域となってしまった。1880年代以降、足尾銅山では良質の鉱物が発見され、選鉱様式の機械化、大煙突完成等によって銅の増産（1890年から1911年までの20年間の年間生産量は6千トン～7千トン）が続いた。1897年には分散してあった足尾銅山の4本の煙突が一本に統合され、当時の増産を支えていた。脱硫塔と名を売って大煙突は完成したものの、その効果はなく、煙毒は松木沢に集中した。

村の森を夢見て

松木村人はこの煙毒で林業ができなくなり、養蚕の桑の木の葉は枯れて現金収入も絶たれ、食材の野菜も育たなくなった。狭い耕作地での農作物収穫は閉ざされ、生活の術を失い、健康がむしばまれる状態に追い込まれていった。

当時の村人は、命を守る叫びとして「人命救助請願」を発していた。その一部には、「脱硫塔建設後、数か月間その効果を注意していると、思ったとおり建設後は煙毒の被害は何倍も激しくなった。民有地はもちろんのこと、官林の樹木は枯れ、脱硫塔から8㌔以内はことごとくはげ山となってしまった。毎年、苗木を植え付けても、ほとんどが枯れてしまい、煙毒で山全体が汚染され、雨が降るたび家や畑に洪水が襲いかかってくる。これでは、家族がはなればなれになり餓死するほかない。代々守り続けてきた家や村に、見切りをつけて移転するにしても、その資金はなく、そうかといって、むなしい思いで鉱毒の激しいこの村にとどまるならば、一刻一刻命を縮めてしまうおそれがある」、と書かれている。

若いブナはこの村人の怒りと抵抗の様子を、先人から聴かされ、後世に伝える使命を与えられているに違いない。きっと、それが幹に浸みこみ、幹に宿しているのである。だから、煙毒や厳しい自然環境に負けるわけにはいかないのである。それがブナの逞しさとなって、多くの登山者を魅了している気がしている。そんなタフなブナの使命を全うしてもらうまで何百年も生き抜いてほしい。

ブナも戸惑う“異常気象の猛威”

一世紀以上を生きているブナは、現在、世界各国で起こっている気候変動による異常気象の猛威に戸惑っているのではないか。100年以上もの時間をかけて、莫大な費用と労力によって岩山に草木が生きていけるようになったこの地を、再び、豪雨で土砂を流して岩山に戻しかねない、と。とてもブナの根や笹などの草木の根の力では土砂の流出を防げない、と不安になっているのではないか。

7月と8月の九州北部豪雨と台風５号の大雨は「50年に一度の大雨」となった。足尾でも1時間に100㍉以上の雨が降ると、ブナの戸惑いは、悲惨で悲しい現実となってしまう。

何とかブナの使命を果たしてやらなければならない。なんとしてもブナの足元の土砂をこれ以上流出させたくない。そのためには土留め柵を造って土を運び上げることを考えている。また、命を守るために「銅山の操業停止」を要望した農民のように、異常気象の原因である地球温暖化にブレーキをかける国策の早急な実現を要望しなければならない。

年内には、ブナを護る第二の取り組みを実現したい。ブナの使命に応えてくれる皆さん、土砂流出防止の土留め柵造りにご協力ください。

（理事・髙橋佳夫）

参考資料：『森よ、よみがえれ』秋山智英著

電気を選んで
～私たちにも出来る
世界の常識！21世紀の

昨年11月4日、地球温暖化対策の新しい国際ルール「パリ協定」が発効、今世紀後半に温暖化効果ガスの排出を実質ゼロにするという目標達成に向けて、世界は再生可能エネルギー100％へのシフトをスタートさせています。

一昔前、再エネはおひさま、風まかせの不安定な電源と考えられてきました。しかし、現在ではそうした太陽光や風力も複数の発電所を統合しネットワーク化することで個々の発電所の変動がならされて基幹電源として活用が可能であること、水力発電やバイオマス発電、地熱発電など安定した出力が得られる再エネも組み合わせれば、再エネ100％も実現可能であることが科学的に証明されています。地球温暖化防止にもっとも効果があり、資源の枯渇の心配も無く、コストも安い（太陽光パネルの価格は40年で1/200に）まさに21世紀のエネルギーは再生可能エネルギーというのが世界の常識になっています。

電力会社を切り替えて原発のない社会へ

では日本はどうか。8月9日にエネルギー基本計画の3年ごとの見直しの作業が経産省所管の審議会で始まりました。現在、2030年度の目標として、原発を20～22％、再エネは22～24％、残りは化石燃料による発電に頼るというエネルギーミックスが掲げられています。無理にでも原発再稼働を実現しようとするのも、再エネの拡大にブレーキをかけるのも、この基本計画がその根拠となっているのです。原発維持を目指す経産省の審議会ですから委員の多数は原発推進派、第1回会合でも電力料金を下げるために原発再稼働を急ぐべき、原発新増設についても議論すべきなど、原発の生き残りを後押しするような意見が多数寄せられました。

一方、日本でも再エネ発電を市民の手で実現する動き、いわゆるご当地電力が増えてきました。また電力自由化で電気を選べる時代になり、消費者が再エネ電気を売る電力会社を選ぶことで、再エネ拡大を後押しすることが可能になりました。今一度、皆さんの電力会社を確認してください。東京電力など大手の電力会社との契約のままの皆さん、電力会社の切り替えをおすすめします。手続きは簡単、工事も要りません。たとえば「パワーシフトキャンペーン」で検索、再エネの供給を目指すおすすめの電力会社を知ることが出来ます。安全でおいしい有機野菜を買うように電気も選んで買う時代。国が変わらないのなら、一人一人の市民が社会を変える、ハチドリのひとしずくが日本を動かします。

（顧問・山崎　誠）

パワー

自治体系電力

中之条電力	群馬県吾妻郡中之条町＋関東（ふるさと納税返礼）	ウェブ申込/電話受付可（まず町内限定）	太陽光（FIT）45.5% 他の新電力や市場調達 54.5% ＊2015 年度実績

地域系電力

須賀川瓦斯	福島県を中心に東北・関東	ウェブ申込/電話受付可	福島県内太陽光（FIT） 25% LNG 火力 43% その他 32% ＊2016 年 4～9 月実績
水戸電力	茨城県を中心に関東	ウェブ申込/電話にて応相談	再エネ（FIT 電気）41% 市場調達 47% 大手電力 12%
千葉電力	千葉県を中心に関東	電話にて応相談	太陽光・風力・木質チップバイオマス・その他余剰電力・大手電力

買う時代へ
地球温暖化対策～
エネルギーは再生可能エネルギー

自然エネルギー供給をめざす パワーシフトな電力会社

2016年4月から電力小売が全面自由化し、続々と新しい電力会社が生まれています。これらの中には、自然エネルギーを中心とした電力の供給を目指す会社もあります。

パワーシフトが重視する点（評価基準）

1．電源構成や環境負荷、などの情報を一般消費者にわかりやすく開示していること
2．再生可能エネルギーの発電設備（FITをふくむ）からの調達を中心とすること
3．原子力発電所や石炭火力発電所からの調達はしないこと（常時バックアップ分は除く）
4．地域や市民による再生可能エネルギー発電設備を重視している
5．大手電力会社と資本関係がないこと

＊再生可能エネルギーの調達にあたっては、大規模な生態系や自然環境・景観の破壊が行われておらず、持続可能性への配慮を十分に行っている発電所からの調達であること、あわせて地域（当該および周辺の自治体や住民）のおおかたの合意を得ていることを前提とします。

＜望ましくない調達＞

・持続可能でない燃料を輸入する木質バイオマス発電
・大規模な森林伐採や土地改変をともなう太陽光発電
・生態系や周辺住民の健康への影響に配慮しない風力発電など

シフトな電力会社一覧（関東、東北周辺に限定）

湘南電力	神奈川県	ウェブ申込/電話にて応相談	神奈川県内太陽光(FIT)49% その他 51% ＊2016 年計画値
グリーンピープルズパワー （みやまスマートエネルギー代理店）	関東	ウェブ申込/電話、FAX 可	FIT 再エネ(木質バイオマス、太陽光)40% 大手電力 60% ＊2017 年度計画

生協系電力

生活クラブエナジー	関東、北海道、東北、中部、関西	電話・最寄りの店舗で資料請求（組合員限定）	FIT 電気 29.3%(太陽光 7.8%、風力 7.2%、水力 3.4%、バイオマス 10.9%、バイオマスFIT以外 35.9%) その他:34.7% ＊2016 年度実績
パルシステム電力	関東、東北、中部（静岡県）	ウェブ申込/申込書（書面）（組合員限定）	FIT 電気 75.8%(太陽光 6%、小水力 19%、バイオマス 51%) 卸電力取引所 9%、大手電力 3% インバランス補給 12% ＊2016 年度暫定値

複数地域供給

日本エコシステム	東北（宮城・福島）、関東、中部、関西、四国、九州	ウェブ申込/電話受付可（太陽光設置が可能な戸建住宅対象）	個人宅屋根に設置した太陽光 不足分はエネットより供給 ＊電源構成比は各家庭ごとに異なる
みんな電力	関東（2017 年 7 月から中部・関西）	ウェブ申込/電話申込可	再エネ 51%(FIT(太陽光):32% バイオマス発電(廃棄物):19%) その他(大手電力等):49% ＊2016 年度実績
みらい電力（エヌパワー）	関東、東北、中部、関西、九州	現在準備中	FIT 電源:59.0% 大手電力:12.1% 市場調達:28.9% ＊2016 年度実績
GREENa でんき（ネクストエナジー・アンド・リソース株式会社）	関東・中部・関西	ウェブ/新規（転居含）は電話受付可	太陽光など(FIT)50% その他 50% ＊2017 年度計画

新電気を選んで

原発に頼らない「森とともに生きる暮らし」を生活に取り入れることについての基本的な考え方、というとても難しいお題をいただいた。どうやら昨年、新電力に切り替えてしまったことが理由らしい。正直なところ、人並みのエコくらいは気にしてはいるものの、これといって人さまにお伝えできるようなことはしていない。さてどうしよう。

気分は“エコな新電力を応援しよう”

新電力切り替えのきっかけは、森びとのフォーラムであった。電力の問題はさまざまなところでも語られているのでここでは割愛するが、こんな僕でも少しは問題意識を持った。エコな新電力を応援しよう。配られたパンフレットを読むと、僕の住んでいる東京・世田谷では「みんな電力」というのがあるようだ。電力の再生エネルギー比率は6割超だから今迄よりは十分環境に優しい気がする。

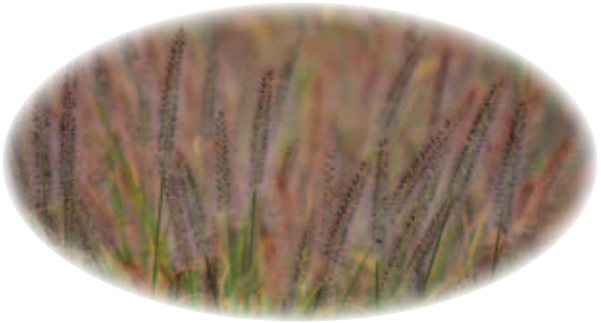
契約はウェッブサイトで30分ほど

早速ウェブサイトを開いてみると今どきのおしゃれなサイトだった。最新の「電気料金のお知らせ」と免許証の画像、あとはカードさえあれば契約はできるらしい。顔の見える電力とあり、小さな発電所がいくつも登録されている。その中の一つを選ぶと、応援した発電所にお金が落ちる仕組みとなっている。中には発電所特有の特典も有るとか。人気の発電所は既に選べなくなっていた。“七世代先の未来へ”と企業理念に書かれた、しかしあまり人気のなさそうなソーラー発電所を選んだ。契約完了までは時間にして30分。

切り替えが少ないから料金は高い？

こうして新電力への切り替えをしたものの、家に送られてくる電気はいろんな由来の電気が混ざっているらしく、純粋にエコな電力とは言えないのだとか。でも仲間が増えていけば、そのうち、“太陽のあかりだけでやっています、原発いらないよね”と言える日が来るかもしれない。僕の場合、少しだけ料金が上がったけれど、ダイエットでお昼を一日抜けばお釣りがくる程度だし、契約する人が増えれば割引もあるそうだ。難しくはないですし、選択肢も増えているようなので、もしまだの方は調べみてはいかがでしょう？

と、さっそく新電力ネタが尽きたトコロで、「森とともに生きる暮らし」のヒントとなりそうな素敵な本の紹介を少しさせて頂く。



暮らしの「当たり前」を振り返る

『楽しい縮小社会』（森まゆみ・松久寛著）。20年前から「後ろ向きに前進する」ことを提案していた著者。ものは少ないが、安心や楽しみがある社会の実現に向け、そのヒントとしての東京・谷根千地域での活動を中心に、社会保障からオリンピックまで多方面に関する議論が提示される。谷根千というと森びと東京事務所には至近。著者の一人が生活しているというので親近感が湧く。では縮小社会を実現するにはどうしたらいいか。「できるだけ使わない、捨てない、無駄遣いはしない、季節に応じた暮らしをする、贈り物はしない、セットでは買わない、きっかけに踊らされない、流行は気にしない、衝動買いはしない」というアタリマエのことをする。ただ、このアタリマエがなかなか難しい。僕自身、どこまでできているか、と問われると、意識に上ったこと、例えば明らかな無駄遣いはしていないが、気が付かない間にそれに反する事に与（くみ）している場合はかなりあるのではないかと思う。特に食べ物なんか、常に外食ですから。そういう意味で、次の本の著者は徹底している。

自分の生き方を確かめてみる

『寂しい生活』（稲垣えみ子著）。これは3.11後の、ちょっとした節電から始まった冒険の物語。生活の中で「これなしでは生きていけない」と思っていた

使っています

もの（例えば、電子レンジ、冷蔵庫）をひとつ一つ手放していく、そして手放すことによって今まで見えなかった本当の豊かさを手に入れていく。寂しい生活とは文字通りの寂しさではないのだ。この本にははっとさせられる言葉が詰まっている。「自分の目で見て、自分の頭で考えて、自分の手足でやるということ。もしやそのことを、今の世の中は「不便」と呼んでいるのではないだろうか。だとすれば、不便って「生きる」ってことです。だとすれば、便利ってもしや「死んでいる」ってことだったのかもしれない。「生きるってこと、この生きている限りの時間をちゃんと生ききるってことなのではないか。すべての瞬間を、そして人間を、馬鹿にせず、差別せず、正面から向き合って、生きるってことなのではないか。」丁寧にわたくしを生きる著者の言葉は、とてもわかりやすくて重みがある。なにより偉そうでなく面白い。

森と生きることは“本物の豊かさ”が身近になること？

二冊とも同じことを書いている。「もの」に振り回されない。「ひと」とつながって生きる。そして、「あたりまえを疑う」。こう書いていたら森でこの文章を置き換えられることに気づいた。森の中に所有はなく、何かと共存しないと生きていけない。そしてとても森は面倒くさくって正解がない。なるほど「森とともに生きる暮らし」とは、「本物の豊かさ」が手に入る暮らしなのではないか。そんなことを気づかせてくれる二冊だった。僕はまず、この身の回りにあるモノを少しずつ減らしていくことから始めようと思った。（事務局・小黒伸也）

★参加をお待ちしています。

・受　付	11時～ 植　樹：12時～15時（予定）、 参加費不要
・会　場	南相馬市原町区しどけ（雫）字南谷地
・持ち物	汚れても良い服と靴、軍手、 リュックサック、移植ゴテ、雨具等
・申　込	氏名、人数、代表者連絡先を記入して、 FAX（0244-23-0311）
・Eメール	seikatsukankyo@city.minamisoma.lg.jp で申込
・問合せ	0244-24-5231（南相馬市生活環境課）

★JR福島駅から無料送迎バスを運行します。

＜行き＞

・集　合	8時45分・JR福島駅西口 （スタッフがお待ちしています）
・出　発	9時　→　現地駐車場11時着（予定）

＜帰り＞

・集　合	15時45分・現地駐車場～ 16時・出発　→ 18時・JR福島駅西口着（予定）
・申　込	電話、FAX、Eメールで氏名、 連絡先を記入して。
・電話 FAX	03-5692-4900（問い合わせも同番号）
・Eメール	info@moribito.info
・定　員	35名（定員になり次第締切ります）

農業用水路でエネルギーの地産地消

～栃木県・那須野が原を訪ねて～

7月20日、森びと栃木県ファンクラブは、那須野が原土地改良区連合（水土里ネット）が運営管理する小水力発電所の見学研修会を開催した。研修会の狙いは、昨年から始めた“原発に頼らないエコな暮らしを創造する”ヒントを得るためである。

この施設は、昨年宇都宮市で開いたフォーラムにゲストとして登場していただいた星野恵美子さんが参事を務めている発電所。最初に訪問したのは那須野が原博物館。ここでは江戸時代からこの地に入植した農民たちが命の源である水を守るための苦労の歴史を学ぶことができた。

この那須野が原は那珂川と箒川に挟まれた約4万haの扇状地。江戸時代から明治期のこの大地は飲み水すら無い不毛の地であった。入植者の生活は困窮を極めたと言われたが、印南丈作や矢板武の情熱で日本三大疎水のひとつである那須疎水を完成させた。現在では330kmもの用水路を要し、田畑や酪農ができる土地になっている。

水は命の源、一滴も無駄にできない

この用水をそのまま垂れ流しているのはもったいないと思った星野さんは、水を有効に活用しようと小水力発電の事業を始め、農家の経費負担を軽減することに成功している。

私たちは、発電所が7か所ある中の百村第一・第二発電所と那須野が原発電所を見学した。百村第一発電所は道路脇の水路に2mの落差をつくり、最大出力は30kwで約10戸分の電気を賄っている。那須野が原発電所は最大出力340kw。ここでは、太陽光発電も行っており、燃料電池を使うことにより夜でも発電できる設備となっている。

また、家畜の糞尿や家庭ごみ、間伐材を利用したバイオガス発電も実証実験中であった。発電所全体の合計最大出力は1,900kwになるが、発電した電気はそのまま使うと送電設備も設置しなければならず、採算が合わないため、全量を東電に売電している。その収入で使用する電気は買うというシステムを取っている。

現在、約3,300名の組合員がおり、こうした取り組みにより、CO_2の削減量は3,121t/年にもおよび地球温暖化防止に貢献している。

「水は命の源です。その水を作るのは森です。近頃は那須の深山ダムの貯水量が減っています。渇水を無くすためには森が重要です。私たちは千年の森を作ってきました。千年先まで生き残れる農村をめざして頑張りましょう」、と歓迎してくれた高橋理事のあいさつが強く印象に残った。

とても有意義な研修ができ、次回は千年の森を訪問することを誓い合った。次回は是非、星野恵美子参事の情熱を伺い、私たちの心に新たな種火を付けていきたい。　　（栃木県ファンクラブ・加賀春吾）

編集長のページ

地球温暖化にブレーキをかけ、異常気象をおとなしくさせる地球に優しい食生活？

大雨被害で夏野菜が高値で取引されると年金生活者には食費に負担がかかって困る。

太陽エネルギーを沢山吸収したナスやピーマン、ニラ、カボチャ、トウモロコシ等の栄養は身体にもよく美味しい。また、少しばかりの手間をかければ、驚くほどの徳をする。

さらに、世界中の人々が地産地消・旬産旬消を暮らしに取り入れると地球温暖化にブレーキがかけられ、もしかすると異常気象がおとなしくなるかも知れない。

暦の上では秋ですが、猛暑を乗り切るためにも、地球温暖化にブレーキをかけて異常気象の猛威と向き合っていくためにも、日本産の麦とホップで作られたビールを飲みながら、これからの食のスタイルを考えたい。

少しばかりの手間をかけると野菜の栄養価と家庭の味を引きだせる

テレビのスイッチをＯＮにしてチャンネルを変えると、食べもの紹介番組や便利な商品の紹介番組が報道されている。かのNHKでも嫌になるほどこのような報道が目につく。しかし、番組をよく観ると、身体に良い食材の紹介や地物推奨をしている番組もある。だが、ビニールハウス栽培や水耕栽培の野菜などを勧めているのはどうかと思う。

地球温暖化にブレーキをかけていく、異常気象の猛威をおとなしくさせたい、ということから食を考えると、キーワードは“地産地消・旬産旬消”と“少しばかりの手間をかける”食生活である。

『その調理、9割の栄養捨てています！』（世界文化社）を読むと、私にとっては幼い頃の食生活を想い浮かべるが、野菜や果物の恵みをいただけることの有り難さを改めて実感する。著書を読んで、早速、日本茶の茎や葉を粉にした茶を飲み、ピーマンの綿も炒めて食べてみる。トウモロコシの芯をスープにし、髭は乾燥してお茶にしてみよう。本当に野菜や果物は捨てるところが少ない。

知って得して美味しい“自慢の味”にチャレンジ！

＜ナスの癌抑制効果はブロッコリー以上＞

ナスの皮にはナスニン等の抗酸化成分がたっぷり含まれている。ただし、ナスニンは水溶性のため、茹でたり煮たりすると成分が流出してしまう。流出防止に油でナスをコーティングして食する。

＜実よりもカリウムが豊富なのは芯と髭＞

トウモロコシの芯は「胚芽」、リノール酸、ビタミンB群、鉄分、亜鉛、食物繊維等が豊富。粒を食べた後は芯を輪切りに、スープのダシにして色々な調理に使う。髭にはカリウムが豊富なので、乾燥させてお茶で飲む。むくみ予防効果あり。

＜血液サラサラのビラジンはピーマンのワタにある＞

ピーマンの苦みのもととして捨てられるワタと種。実は血液サラサラ効果成分の“ビラジン”が豊富。ワタにはビラジンの量が皮の10倍もある。美肌効果や代謝促進が期待できる。

＜マルチビタミン野菜のニラ＞

葉先には、ビタミンA、C、E等が豊富。ニラに含まれているクロロフィルは腸内の解毒効果が期待される。

根元はみじん切り、葉先はざく切り。根元のアリシンを摂るならできるだけ細かく切って活性化させて、10分以内に食べる。葉先のビタミンは細かく切るとビタミンが失われる。短時間で調理することが大切。電子レンジで短時間におひたしにして食べてみては。

是非、試してください。二酸化炭素を大量に排出して運ばれる食材よりも、食の地産地消・旬産旬消で地球温暖化にブレーキがかけられる。エネルギーの地産地消は気象が安定していることが不安のない供給になる。この関連性を暮らしに活かし、取り入れて、地道に暮らしの見直しをやっていきたい。

ここから、企業戦略のためにつくられた簡単で早いと言う味ではなく、少し手間をかける楽しみが“自慢の味”として生まれる気がする。（髙橋佳夫）

足尾発！

5月20日に開催された第36回足尾・ふるさとの森づくり。

いつも元気な声で木を植えている「希望の家」の皆さん。中型バスに乗って、鹿沼市からやってくる。皆さんは毎年の植樹祭が楽しみ、希望の家ではどんぐりを拾って苗も育てている。近くの公園の草刈りなど、森づくりもしている。

勿論、育樹・育苗に欠かせない刈払い機やチェンソーの操縦やメンテナンスも手慣れたもの。足尾で使用しているチェンソーメーカーに気づくと、「俺たちが使っている〇〇社と同じだ！」と話しかけてくるほど。

そんな皆さんから、植樹後の写真と感想文の一部が届けられた。

まえに植えた木々が大きく育っていました

田野井　郁香さん

今回参加したのは2回目でした。去年は初めて足尾に行きました。途中で暑くなってきたので、水分とりながらやりました。

ボランティア(森びと・インストラクター)の人もとてもやさしかったです。

自分でもあきらめないでがんばろうと決めました。来年も足尾に行きたいって思いました。参加しようって決めました。つかれましたけど、また行きたいって思いました。ひやけ(日焼け)はしたくなかったです。

坂田　美郷さん

足尾に行って楽しかったです。ふるさとの森づくりの苗をうえるのがとっても楽しかったです。前に植えた木は3年間で大きくなりました。自然と山がとっても綺麗でした。

お弁当がとっても美味しかったです。また来年も足尾にいきたいです。私は自然と山がとっても綺麗なので感動しました。自然を大切にしたいと思います。

星野　操さん

第36回足尾ふるさと森づくりは楽しかったです。来年も行きたいと思います。

前に植えたどんぐりの苗が大きくなっていました。5月20日に植えたどんぐりも来年あたりは大きくなっているでしょう。来年もどんぐりの苗を植えたいです。とっても楽しかったです。ボランティアさんたちにもいろいろと教えてもらいました。感動しました。たくさんのお客さん（植樹の参加者）がきていました。おおぜいでにぎやかでした。

第36回足尾ふるさとの森づくり

★参 加 者：376名　★植樹本数：4,000本　★植樹面積：1,900㎡

★樹種22種：ミズナラ、シラカンバ、イタヤカエデ、ヤマザクラ、ナツツバキ、カツラ、コブシ、エゴノキ、ハウチワカエデ、コハウチワカエデ、ヤマモミジ、クリ、ハクウンボク、コナラ、トチノキ、クヌギ、ブナ、オオシマザクラ、ウワミズザクラ、エノキ、ヤマボウシ、ケヤキ。

こちら！みちのく事務所

6月24日（土）は第14回八幡平ふるさとの森づくりでした。今年は5年振りに盛岡農業高校の近藤修三教諭と生徒たちが参加してくれた。

盛岡農業高校・近藤先生たちと生徒たちとは、松尾鉱山跡地で植樹をはじめた時からのお付合い。極酸性地での植林に関して、彼らもシラカンバ等のパイオニア種の育樹研究を行ってきた。また、森びとプロジェクトが神奈川県横浜市・横国大キャンパスで最初に開催した「キャンパスフォーラム」にも生徒たちがパネラーとして参加。人と森との共生の大切さを考えてきた。

その後輩たちが植樹体験の感想文を届けくれましたので、以下、紹介します。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鉱山跡地の自然の変化に興味がありました。何十年も鉱毒に晒された山の自然が樹木の力でどのように変化するのか、この目で見たいと思っていました。

植林という環境ボランティア活動に参加するのは初めてだったので、自分が本当に役立つのか心配でした。しかし、参加して、酸性化した土地に植林するには土壌改良などの下地づくりが大切であることを学びました。また、10年前に植林した地には、ベニバナイチヤクソウ等の山野草や低木が少しずつ生えて自然が蘇りつつあることを感じました。私が植えた木も大きく生長して八幡平の自然を豊かにしてくれると願っています。　　笈川堅士朗

私は松尾鉱山を知ったのは高校生の時でした。硫黄精錬過程では多くの木が枯れ、その排水で北上川が濁ったことも知りました。植樹に参加してみて想像以上に木が生えており、皆さんのこれまでの努力が目に見えて驚きました。

しかし、木々の背丈が低く、枯れはじめている木もありました。そのため毎年沢山の苗木を植えつづけ、少しでも大きく生長する木が増えるようにしなければと思いました。私の植えた木々も生長してほしいと思いました。今回は、未来に続く植林活動に参加できてとても嬉しく思いました。　　石川　詳

日差しの強い中での植樹祭でしたが、得たことが多くあり、参加して良かったと思っています。

松尾鉱山跡地で話を聞き、この地に緑を増やすことの大切さを知り、また、そのために続けられている長期の森づくり活動を知ることができました。植樹祭では、学校での方法とは異なり、土ごと入れ替える植林でした。風雪厳しい地で大規模に行う植樹は新鮮な感覚を得て、今後の参考になりました。この経験を今後に活かしていきたいと思います。

大平宝花

初めて植林活動に参加しました。農業高校で植林を学ぶ自分にとってはとても大きな経験でした。また、自然豊かな八幡平の地を歩き、岩手がいかに環境に恵まれた地であることを改めて感じました。

若者の自然や農業離れが心配される中ですが、この活動で多くの人々の視線が自然に向かっていることを実感し、とても嬉しく思いました。今後も多くの人が自然保護活動に参加してほしいと願いました。

勿論、自分もこうした活動に参加し、農業高校生として、地域の未来を担う役目を果たししていきたいと思います。植樹祭に参加させていただき本当にありがとうございました。　　歌岡大祐

（みちのく事務所・鎌田　恒）

第14回八幡平ふるさとの森づくり

★参　加　者：126名　　★植樹本数：1,500本　　★植樹面積：200㎡
★樹種11種：ミズナラ・オオヤマザクラ、カシワ、コナラ、ヤマモミジ、ツリバナ、ハナノキ、クリ、ウワミズザクラ、コブシ、ナナカマド。

こちら！南相馬市

地域に根ざした顔の見える地域貢献活動を息長く続けたい

東日本大震災以降、全国各地の皆様方からのご支援とご協力をいただいておりますことに改めて感謝と御礼を申し上げます。

私たち原町地区連合は福島県の南相馬市と飯舘村において22労働組合の約2,300名の組合員が活動しています。私たちの暮らしを一変させた東日本大震災から6年が経過しました。この間、この地域に暮らし働く者として「地域に根ざした顔の見える活動」の取組に努めてまいりました。

昨年、南相馬市ならび飯舘村は一部を除き避難指示が解除されました。しかし、未だ多くの皆様が避難生活を余儀なくされています。そのような中で、原町地区連合は地域の復興・再生に必要とされているボランティア活動に力をいれてきました。

南相馬市では、津波により甚大な被害を受けた沿岸部に命を守る森の防災林として鎮魂の森を築く植樹祭が行われています。私たちはこの活動に賛同し、積極的に参加しています。植樹する前には本当に防災林を築くことができるのか不安な面もありましたが、これまでに植樹された木々がゆっくりとではありますが生長しているところを見ることで、地域の復興・再生が進んでいることを実感しています。

原町地区連合の各労働組合は、植樹に参加することで多くの方々と知り合う機会が得られるとともに、植樹した木々の生長を見守ることにより、地域の復興・再生の一端を担っているという意識が高まっていると思っています。最近では、若い方々の参加も増え、植樹や除草作業で市民と共に汗をかくことにより、市民との連帯感が醸成されるとともに、地域の皆様にも地区連合がどのような組織なのか知っていただく良い機会となっています。

市民の命を守る森の防潮堤を育てていくためには植樹前準備、植樹、除草などの作業が伴います。植林後の数万本以上の木々を大きく育てていくためには、植樹後も苗木が自立できるまでの除草作業等を行わなければなりませんので、息の長い取組みが必要であると思っております。

これからも多くの人手が必要となりますので、原町地区連合としても引き続き取組みを行ってまいりたいと思います。また、全国の皆様にも引き続きご支援頂けますようよろしくお願いいたします。

結びとなりますが、今後も原町地区連合の地域貢献活動の一環として森びとプロジェクト委員会の皆様と連携をさせていただき、南相馬市の復興・再生に向けて地域に根ざした顔の見える活動を行ってまいりたいと思います。

（原町地区連合議長・白坂　陽一郎）

足尾町・松木村跡地の生きものたち

～第１回～

（写真：唐澤真子）

（写真：唐澤真子）

2005年から木を植えている足尾町の松木村跡地。1メートル以下の苗木は10メートル程の若木に生長し、松木村跡地には小さな森が育っている。そこで当委員会は森の友だちを観察していこうと、昨年から松木村跡地周辺の生態観察を続けている。栃木県在住の森びとインストラクターが中心となって「生態観察チーム」を結成、観察は2019年の森びとプロジェクト委員会設立15年まで続ける。

今号から、会員の『森びと通信』アンケートの要望に応えて、「松木村跡地の生きのたち」を紹介していく。

松木村跡地は草地で、今でもこの地を耕さないことにはイネ科の草以外は生えないようだ。この地に幼木を植えるために開墾すると草の根が密集し、土は固まっていた。この土を粉砕してやると、その年の初夏には写真のようなビロウドモウズイカが顔を出した。耕す前の草地では見たことのない花だったが、開墾されるまでじっと地中で待っていたのか。二年間の寿命らしいが、一気に2メートルも生長するのには驚きだ。

その他にもセイヨウノコギリのように次々と顔を出す草たち。そうなれば虫たちも目立つようになり、虫を追って鳥たちの囀りが聴こえ、四季の鳥たちの楽園のような草地に変わる。

今年の春、2015年に植えた「民集の杜」にウグイスが巣を作り、卵を産んでくれた。50cmから60cm程の幼木が生き物たちの楽園を育てているのかと嬉しくなる。

昨年秋、本格的な冬を迎える前のホンドキツネの親子。この子キツネは間もなく親から離れ、一匹で生きていく。今年の春、作業小屋の裏の土手に子キツネが日向ぼっこしていた。命がつながっていることに感激する瞬間であった。

（生態観察メンバー・宮原哲也）

足尾で一週間以上の森作業をする時のねぐらを「どくだみ荘」と呼んでいる。足尾銅山が営業していた時の古い社宅を私たちはそのように呼んでいる。この度、森の番人の暮らしが紹介できることがとても嬉しい。

各地から駆けつけてくるスタッフの皆さんを待ち、共に森作業をこなし、夕方にはブログ更新と夕食準備、軽く呑んで疲れを取って床に就く。森の番人のいつものコンビは髙橋副理事長と筆者だが、髙橋さんが入院した6月は、緊急事態でしたが橋倉さんが筆者に付き合ってくれた。

スタッフの気持ちに支えられた8日間

いつもなら髙橋副理事長のあとをついて行けば、一日が終わり、あっという間に一週間が過ぎるパターンだった。

6月は、頼るべき人は足尾に来ることはできなかったので、筆者は不安な気持ちでいた時、「仁平さん、やろう！」と番人の仕事を押してくれたのが橋倉さん。この一言はとても嬉しかった。その上、6月17日から始まった夏の森作業には、多くの森びとたちが集まってくれたので、それはとても心強かった。

作業予定は毎月下旬、スタッフに知らされるが、足尾現場は山間部であり、作業内容は気象や生き物たちに左右される場合がある。大事なことは「現場で何を優先するか」だ。

前日の夜は、番人は天気予報を聴きながら、作業予定の再確認。獣害は現場に着いてみないと分からないので獣害対策も念頭に置いての段取りを頭に叩き込んで現場に向かう。これは番人だけではなく、森作業に入るスタッフは誰もが頭に描いて現場に来る。

今までは受け身だった筆者だったが、今回は8日間、橋倉さんと過ごすことができ、作業の段取り等に自信をもてた。番人の作業案がなければ、現場でのミィーティングでは話が噛み合わない。「まぁー、いいか」という具体性のない話では、“本物の森を作りたい！”というスタッフの気持ちが許さない。

今回は、後からついていった自分が、スタッフの気持ちに支えられて“自らつくりだす”という知恵が養われた気がする。スタッフに感謝です。

深夜の苦戦・ブログで共有できる森づくり

1週間の森作業報告は毎日のブログで報告してきた。ブログでは足尾松木の情景や季節感そして作業の様子などを、写真と文で報告されてきた。

橋倉さんとの話して、「一日の作業はその日の内に更新しよう」ということだった。会員やスタッフは、ブログを見ながら足尾の森づくりの進み具合などをチェックしている。その期待を裏切ることはできないし、ブログ更新を遅らしている担当は誰だ、と思われたくないので、一番苦労したことがブログ更新だった。

20日に更新したキツネの紹介は話題となり、また、民集の杜に巣を作ってくれたウグイスの赤い卵の写真も話題になって担当者としては気分が良かった。

現実は、写真の取り込みに苦戦していて深夜までかかってしまったことなど、呑む時間を割いた二人の苦戦は、後に、ブログが話題になると心の中で“ガッツポーズ”となっていた。

森も分かってくれる強者の「骨休め」

いつもの目覚めはウグイスやカッコウの鳴き声。トタン屋根に雨音がしないとホッとする。朝4時30分、トタン屋根に当たる雨音で目を覚ます。そっと起きだして、風呂場のガラス戸を開けると大粒の雨が降っている。「ヨシッ！」と心の中で叫び、ホッとして布団にもぐり込む。

スタッフの高齢化を心配して今年から1週間に一日は「休養日」を設けよう！となっていたので、2人は「今日は雨、休養しよう！」と、近くの「やしおの湯」に向かうことは無条件で即決。

温泉につかると、気持ち良い湯加減だったので、一気に疲れが吹っ飛んだ。

湯につかりながら、「シニアの骨休め」の大切さを話し合った。スタッフの多くは“強者”と呼ばれ、大変な仕事も一生懸命やり遂げ、ある意味では森づくりに命を懸けている。そんなメンバーだから、弱音をはかないから余計に「休養」をとらなければ駄目だとなった。身体が動かなくなるまで森と付き合

ハッピーな！一週間

う、手塩にかけた木々の生長が未来を生きる若者たちの心に響いてもらいたいと思っているスタッフたち。ある人が言っていた「年を重ねると疲れたことも感じなくなるから、強制的に休まないとダメ！」と、これを大事にしようとなった。年齢に見合った森作業を進めれば長生きができるかもしれないね、と気持ちを落ち着かせて長湯になってしまった。

元気の素は家庭の味と スタッフが届けてくれる無農薬の野菜

番人の元気の素は毎日の食と酒、そして杯を酌み交わしながらの話だ。

2日に一回は筆者の携帯に近所の塚原さんから電話がかかってくるし、仕事を終えて「どくだみ荘」の駐車場に着くと塚原さんが鍋やタッパーを持って待っていてくれる時もある。電話は、「おかずが出来たので、取りに来て」とかかってくる。「いつも、美味しいおかず有難うございます」とお礼を言うと、「森びとさんがやっている事は大変素晴らしい事で、何か手伝う事や出来ることは無いかと考えておかずを作る事にしているの、何にも気にしないで」と言ってくれた。いつも遠慮しないでご馳走になっているが、本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

7月中旬、退院して足尾入りした髙橋さんに、塚原さんは「快気祝いだから食べて」と、重箱に盛った赤飯を持って来てくれた。木陰で食べた赤飯はとても美味しかった。

揚げ物が好きな筆者は、髙橋さんがいないと簡単な揚げ物に手が伸びる。そんな食事に流れされがちな筆者にブレーキを踏んでくれるのが塚原さん。身体に気を付けた野菜のオカズは、森の番人の元気の素になっている、と言っても過言ではない。

暑い夏は、素麺や冷やし蕎麦を具沢山の汁で食べられるのが嬉しい。その具とは、群馬県在住スタッフが届けてくれる無農薬の野菜が主だ。とくにキャベツとナスとサバの水煮の缶詰を少々の油で炒めた具に、麺つゆを薄めた汁が旨い。

とはいっても毎日では飽きるので、昼食のメニューは朝考える。昨夜残ったおかずを確かめ、食材を残さないように、筆者の少ないメニューから昼食を作る。今回の泊り番は、メニューが豊富な橋倉さんの手料理が有り難かった。

「どくだみ荘」の宿泊代は一人三食付きで500円。買い物は、宿泊数×500円で地産地消の安い食材を手に入れる。それをサポートしてくれるのが家庭農園の無農薬野菜だ。松村宗雄さんと、松村健さんが食べきれないほど届けてくれた時は、隣の菊地さん、塚原さんへお裾分けをする。

夏はシャワーが多い 湯船に入るのは三日に一日くらい？

意外ときれい好きな筆者は、風呂用に洗剤を用意して掃除をこまめにしている。

汗を流した後は、一方はブログ更新に集中し、他方は夕食の準備。なんとかブログ更新させた後は杯を交わす。なんとも言ず気分がいい。男二人が8日間も一緒に過ごしても話題には事欠かない。客人が宿泊するとなると話は深夜まで続き、杯もすすむ。また、1週間も一緒にいると気が合わない事もある。そんな時は我慢しないようにしている。勿論、相棒を気遣って話をするが、何でも話し合うようにしている。そうなると話は深夜までかかってしまう。

「どくだみ荘」は長屋なので、隣との壁の厚さはコンパネ一枚ほど？朝4時には散歩に出かける隣のご年配の菊地さんからすれば、深夜の話しは迷惑なことだ。菊地さん、すみません。迷惑をかけながらの話は、時に番人の元気とやる気を育てているのかもしれない。

おわりに

65歳以上の男2人が8日間も一緒にいると、橋倉さんの優しい人柄が無頓着な筆者の心を耕してくれる。耕された心には目に見えない“糸”がよじられていく。それは太くなって、森ともの熱い志に結実しているようだ。そんな気分がとてもハッピー！だ。

（文・仁平範義　助言・橋倉喜一）

森と人との話を

会員の皆さん、第12回通常総会で選出された新理事と新アドバイザー方々を紹介します。今後は森と人とのつながりなどを暮らしに活かしていく事業を進めていきますのでよろしくお願いします。

自然と共に生きていける喜びをいつまでも

縁あって森びとの理事をお受けした。なかなか厳しく真剣なNPOだ。自然を愛し育む人たちの集団である。しかも通年のボランティア活動で、その本気度は軍団のような感がある。JR東労組などの若手会員が事務局を担い、現場の通年ボランティアは、退職者の方々がしっかりと地に根ざした活動を担っている。

苗木を密植し、木々はその中で戦い、生き延びた木がイイのだと。でも鳥獣達が運んで来たのであろう実生の木々の方が、植えた苗木より案外強かったり、と。もしかしたら鳥たちはその上をいってどこに糞をすれば次の餌になるぞ、と分かっているのかも知れない。

子どもの頃、北海道の原野で日がな遊んだ。藪の中を歩き回りいつも漆にかぶれて、ぴかぴかに腫れた顔をしながらそれでも休むこと無く、ゴム長にたも網とバケツを離さなかった。

鳥や野ねずみを見ると追いかけては、その巣を探し、雛が孵り巣立つのを毎日何度も見に行った。野ねずみの巣穴をスコップで掘り進み、一番奥に藁の中にピンクの毛の無いまぶただけがぽこんと腫れた赤ちゃんが出て来た時には嬉しくて嬉しくて小さな掌に何匹も抱っこしていた。結局は死んでしまったのだろうが、やめられない禁じられた遊びだった。今でもやりたい。

ヨシキリやカッコウの声を聴くと、あの頃の風の冷たさや匂いを想い出す。60年も前のことなのに，自然はいつまでも身体の中に染みこんでいる。自然は本当に素敵だ。　　（理事・平木ちさこ）

木炭を地面に埋める話

自然に対する興味を持ったのは中学、高校のころ。そのため大学で林学を専攻し、林野庁へ。就職してからは、北海道から九州までほぼ2年おきに異動し、いわば税金でもって全国を旅してきました。それが何らかの財産になっているのかどうか。そして公務員として最後に勤務したのが足尾を管轄する日光森林管理署だったことから「森びと」を知り、現在に至っています。

話は変わりますが、皆さん、大気中のCO_2を減らす一番簡単で経済的な方法はご存知ですか？産業革命以降、地中にある炭素を掘り出し使ってきたのが、現在の大気中CO_2濃度上昇の原因です。単純な解決策は、これをもう一度地中に戻してやることです。そして、その一番簡単な方法は、木材を炭にして地面に埋めること。木炭はほぼ純粋な炭素なので、地中にあって変化することもありません。このことは森林総合研究所の最後の炭化研究室長であって、東大名誉教授の谷田貝光克先生に25年くらい前に教えられました。

単純な話ですよね。こんな話を森びとの皆さんとして、世の中に広めていけたらいいなと思っています。よろしくお願いします。　　（理事・井上　康）

暮らしの中へ

“都と心に木を植えたい”

この度新たに理事に加えて頂きました東京都議会議員のもり愛です。
「まちに森　ひとに愛」をキャッチフレーズに地域の環境政策に取り組んで参りました。山と心に木を植える「森びとプロジェクト」の活動に共感し、毎年植樹に参加させて頂き約１０年、植えた苗はしっかりと大地に根を張り、木々が森になってゆく姿がとても美しいです。昨年は娘が生まれ、可愛い子ども達のみらいに緑豊かな環境を守り築いてゆきたいと改めて強く願います。

足尾の森づくり、そして南相馬の命の防潮堤づくりを多くの方に知って頂けるよう精一杯プロジェクトを発信してゆきたいです！よろしくお願いいたします。

連日の猛烈な暑さと夕方の激しい雨に襲われる等、東京が熱帯性気候になってしまった様な状況に、ヒートアイランド対策としても都市における緑は重要です。

都内の屋敷林がマンション開発で次々と姿を消しており、区で保全を求めましたがデベロッパーの提示価格に叶わず貴重な都市の森が姿を消している状況です。

森は水を貯え、豪雨に対しても自然のダムの役割を果たしてくれますが、森が姿を消し、ゲリラ豪雨により水害ももたらされています。

東京においても、民地の森・緑を都民のみなさんと共に守る仕組みが必要です。子どもたちと地域のドングリを育てて「まちに森　ひとに愛」をキャッチフレーズに子ども達と共に、森と心に木を植える活動が都内でも出来たらと願っています。

（理事・森　愛）

足尾の植栽木を見守っていきたい

森びとプロジェクトとの出会いは平成16年、森びとが足尾で活動を始めた時からのお付き合いになります。森びとからのオファーは、年間を通じた様々な活動を息長くやれるフィールドという、これまで国有林で受け入れてきたボランティア植樹とは性格の異なるものでした。国有林に適地がなく、栃木県の治山施工地・臼沢となりましたが、国有林ではボランティア受け入れ制度に限界もあり、結果的には現在のような活動の場は実現できなかったのではないかと思います。また当初の盛り沢山の活動計画に私自身懐疑的だったと思いますが、ひとつずつ課題を克服しながら計画を実現していく過程は私にとって驚きでしたし、役所生活で凝り固まった既成概念を覆されるような思いでした。こうした経験が、このあと会津の炭散布実証や南相馬の海岸林再生への関わりなどに繋がったのだろうと思います。

昨年35年務めた林野庁を退職し、今年からアドバイザーとして森びとの一員となりました。これまでの軛からすぐに逃れられるとは思っていませんが、これからは固定観念にとらわれず柔軟に、森びとの活動に楽しく関わっていきたいと思っています。特に足尾は私のキャリアのベースにもなった場所なので、見事に育った植栽木のこれからの推移や周辺環境への効果などについて引き続き関心をもっていきたいと考えています。今後ともよろしくお願いします。

（アドバイザー・川端省三）

森のレストランで働く小さなグルメの大切な仕事

今年度から森びとのアドバイザーに就いてくれました島野智之さん。海外出張など超多忙な日々を森で過ごしている？忙しい島野先生ですが、次回から森の友だち（ダニ）たちを『森びと通信』で紹介します。本号は、島野先生を紹介します。

＜島野智之アドバイザー＞

島野　智之（しまの　さとし）
1968年　富山県生まれ
1997年　横浜国立大学大学院工学研究科博士過程修了
現在、　法政大学自然科学センター教授。

『子供の科学』8月号より

豊かな森を支えるササラダニ類

ササラダニ類は、名前のついているものだけで世界中に1万種程知られ、まだ名前ついていないものまで含めると10万種程になるのではないかと考えられています。ダニ類の中でも著しく多様性の高いグループで、日本では850種が記録され、その多くが森の分解者です。

ササラダニ類の特徴は動作がとてもゆっくりしていること、他の生き物を襲うことはほとんどなく、平和主義的な生き方に好感が持てます。植物質を好んで食べるとはいうものの生きた植物は食べず、落ち葉や小枝、そこに生えるカビなどを食べています。ササラダニ類は普通の森でも1平方メートルに2万匹から10万匹が生息しています。この数のササラダニが他の土壌動物や微生物と力合わせ有機物を分解しています。

ササラダニは人間の血を吸うことはないので、落ち葉の中に寝転んでも大丈夫。森に入り、寝そべって土の匂いを嗅ぐ、落ち葉に手を入れてダニたちとふれあうなど、面倒な人間の社会からしばし離れて、ダニの目線で森の床を眺めていると、肉眼では見えなくてもダニたちが生きていることは実感できます。

分解者としてのササラダニ

ササラダニは生態系の中でとても大切な役割を果たしています。生態系は、太陽エネルギーによって光合成を行う「生産者」、摂食・捕食者としての「消費者」、そして有機物から無機物をつくり生産者の栄養とする「分解者」からなり、ササラダニはその中の分解者です。落ち葉をはじめとした植物遺体（落枝、倒木、打ち上げられた水草や海藻など）を物理的に粉砕するのがササラダニの役割です。ササラダニの糞は「落ち葉のハンバーグ」と言われています。

落植物遺体はササラダニに食べられると、ダニの消化管からの分泌物がハンバーグの“つなぎ”のように作用して、胃の中でこね合わされ、本当のハンバーグのような形の糞になのます。この糞は、土壌微生物（バクテリア類やカビ・キノコなどの糸状菌類）にとって最高のごちそうになります。

ササラダニは「美味しいもの」がわかるグルメ

ササラダニは、食べ物とそれ以外のものをどのように区別しているのだろうか？

一般的に、生きている植物の葉には、特有の臭い（揮発性成分）がありますが、これらは基本的に昆虫などに葉を食べられないようにするためのものだと考えられています。例えば、クスノキ科の植物は強い臭いがあります。タンスに入れる樟脳はクスノキからつくります。落ち葉になってからもこれらの成分は残りますが、幾分少なくなるでしょう。そこで、分解者は、新鮮な落ち葉と古くなった落ち葉を区別し、古く成熟して美味しくなった葉の方を好んで食べます。ササラダニは、触肢を使って餌の物理的な位置や味覚という科学的な情報を感じとっています。触肢先端に生えているユーパシディウムという毛には、臭いを感じる鼻（嗅覚）や味を感じる舌（味覚）の役割があるらしいのです。

「森の落ち葉の掃除屋さん」こと、ササラダニは豊かな土壌をつくる“美食家”でもあるのです。島野先生は世界を飛び回って、このグルメを調査研究しています。その一部をこれからシリーズで紹介します。

（東京事務所・清水　卓）

心の森便り

ご支援ありがとうございました

この度、NPO「森びとプロジェクト委員会」の皆さまには、清流とブナの原生林『恵みの森』遊歩道の整備にご支援をいただき誠にありがとうございました。

『恵みの森』は、地域住民の40数年にわたるブナの伐採反対運動の結果残された940ヘクタールという広大な森です。子供からお年寄りまで気軽に入山でき、さらに、麓の布沢集落では農山村の歴史や伝統文化、人々の素朴な暮らし、そして日本人が忘れかけている故郷の原風景に触れることのできる、正にユネスコエコパークに登録された只見町にふさわしい集落だと私たちは誇りにしています。

今、日本の農山村は人口減少と高齢化に直面し、集落の維持に難儀しています。そんな中で「森びとプロジェクト委員会」の皆さんが、全国各地からかけつけ『恵みの森』の遊歩道刈払いの支援を頂き、大きな元気をいただきました。

私たちは、人口減少に悲観することなく美しい集落景観や有形無形の資源に更に磨きをかけ、忘れかけている故郷の原風景に感動し、癒され、本当の豊かさ、本当の幸せとは何かを考えていただけるような集落づくりを目指しています。都市のみなさんと山村住民が軽やかに行き来する『ちっちゃくてもいい、風格と価値ある集落』つくりを願っています。どうか今後も更に交流を深めていただき、ご支援を賜りたくお願いしお礼に代えさせていただきます。

ふざわ楽しさと元気づくりのみんなの会

（事務局・刈屋晃吉）

体験植樹での驚きと感動

初めて足尾銅山を目の当たりにして、私はとても驚いてしまいました。想像していた以上に、山肌が見えており、なんだか痛々しいと感じるほどだったのです。しかし、その驚きは、講師の方々のお話を聞いた途端、やる気へと変わりました。古き良き足尾の村を、取り戻さなくてはならない！強くそう思ったのです。

お話を聞いた後、私達は105本もの苗木を植樹しました。始める前は、苗木の数が多すぎるのではないだろうか…と危惧していましたが、そんな心配は全くありませんでした。講師の方々の指導を元に、みんなで力を合わせて、見事105本の苗木を植え終わることができたのです。

自然に生きる者たちの生命力の強さと知恵、そして儚さ。私達は、そんな彼らに生かされており、彼らと助け合って生きている。そんなことを実感しました。

今回、私達が植えた木々たちが、長い年月を経て立派に育ち、これからの地球を救ってくれることを祈ります。私達の未来への投資が、無駄になることのない世界になることを祈ります。短い時間でしたが、これからの地球について考える機会をくださり、誠に有り難うございました。

（桐生市・私立樹徳高校　高2女子）

いままで自分の手で木などを植えたことがなかったのでとてもいい経験ができたと思います。この大地を支えているのが木だというのは前から知っていたにしても、今回の講義で再び強く意識され、木をより大切にしていこうと思うことができました。

地球温暖化が進む現代で木の必要性を深く知り、10年後の木々の探索をした時は、自分が植えた木がこんな風になるんだと思ったらついウキウキしてしまいました。

今度また行ってみたいなと思い、地球のために自分にはなにができるのかを思い直す機会になりました。今回はこんな貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

（桐生市・私立樹徳高校　高2男子）

心の森便り

5月20日、同僚に誘われて初めて足尾ふるさと森づくりに参加した。もちろん森びとプロジェクト委員会の発足の経緯と取り組みについて知ってはいたが、これまで参加する機会を作れなかった。「山と心に木を植えよう」という森びとのキャッチフレーズについて「上手いこと言う（作る）なー」と思っていたが、苗木を持って急斜面の階段を登り、汗をかきながら植え付けて見て、そのキャッチフレーズの意味するものが分かったような気がする。

私自身これまで植樹の経験は、労働組合結成20周年記念として、岡山県の山奥で行ったことはある。山口県の山間部で生まれ育った私は、小さい頃から祖父や父に連れられて炭焼きや持山の杉の枝落としなど、遊び感覚で山に接し、山に育てられた。山や森の重要性は自分なりに分かっていたつもりだった。

7月に九州北部豪雨被災地を視察した。福岡県朝倉市ではあちこちで山肌が崩れ、河川が氾濫し、泥と流木で溢れかえっていた。「山が死んでいる」と実感した。地球温暖化の影響が大きいとは思うが、全国どこでも自然災害が起こる可能性があり、決して他人ごとではない。

今回参加し、森づくりが一人称で考えられるようになった。環境問題も強く意識できるようになった。「自分でできることをやろう」「仲間に語り掛けよう」と決意した。

最後になったが、準備していただいたスタッフの皆さんに改めて感謝申し上げる。

（東京都・田村　豊）

私たちの事業は公益財団法人イオン環境財団、東日本旅客鉄道労働組合、一般財団法人JR労研、多くの会員の皆様、団体会員さま、植樹協力企業さまのご支援に支えられています。心から御礼申し上げます。

フォーラムの案内

地産地消が地球温暖化にブレーキをかけ、原発に頼らないエネルギーを安定的に供給することにも繋がる暮らしを考えるフォーラムを森びと県ファンクラブが計画中。

神奈川県フォーラム

名称：食もエネも地産地消
　　地球に優しい暮らしを考える市民フォーラム（仮称）
日時：2017年11月11日（土）10時～ 17時
会場：横浜開港記念会館講堂
　　（横浜市中区本町１丁目６番地）

＜プログラム＞
・午前中：映画上映
　　「日本と再生」（河合弘之弁護士監督作）
・午　後：基調講演～講師：涌井史郎氏（予定）
・パネルディスカッション
・クロージングスピーチ：岸井成格　理事長

栃木県フォーラム

名称：食もエネも地産地消
　　エコな暮らしを考える市民フォーラム（仮称）
日時：2017年11月26日（日）13時～ 16時30分
会場：宇都宮大学工学部陽東キャンパスアカデミアホール

＜プログラム＞
・基調講演：岸井成格　理事長（予定）
・パネルディスカッション

編集後記

現役の頃、「草の乱」という映画撮影のエキストラとして秩父郷の河原を走ったことがある。当時は、秩父困民党の“世直し”として、軍律を守って戦い抜いた秩父農民の闘志を追想した。

本誌で中倉山のブナの魅力を描いてみたが、小生の願いは、何とか根の所だけでも土砂の流出を防ぐ応援を仰ぎたいからだ。当時の秩父郷、松木村の農民は桑の木とお蚕さんに支えられていた。それを奪ったのは政治だ。

「現状維持は退歩なり!」、また、“知的に武装しているだけでは権力者の暴走に対抗できない”、という意味が好きだ。松木村農民、谷中村農民そして秩父郷の農民の闘志を、再び、全国の森ともたちと分かち合いたいと思いつつ23号を編集した。　（OWL）

森びと通信　Vol.23（2017年9月1日）
発　行　NPO法人　森びとプロジェクト委員会
発行人　岸井　成格
編集人　髙橋　佳夫
〒114-0013 東京都北区東田端 1-12-24　二美ビル 201 号室
TEL&FAX 03-5692-4900
E-mail info@moribito.info　http：//www.moribito.info/
（みちのく事務所）〒020-0045　岩手県盛岡市盛岡駅西通 2-16-31
TEL&FAX 019-623-1014　E-mail mrbt-michinoku@max.odn.ne.jp